知的障害のある生徒の就労を見据えた進路指導に関する考察
－職場実習でのサポートブックによる支援を通しての考察－

A Study of Counseling Methods for High School Students with Intellectual Disabilities: Choosing a College while Considering Future Employment

（2010年３月31日受理）

山部　淑子*　　松田　文春**　福森　　護
Yoshiko Yamabe　Fumiharu Matsuda　Mamoru Fukumori

Key words：就労支援，サポートブック，進路指導

要　　旨

知的障害のある生徒の学校教育修了後の進路決定に向けて，学校教育段階での進路指導の取り組みがその方向性に大きく作用すると言っても過言ではない。特に，就労に向けての職場実習等の取り組みは，生徒が自分自身の進路に対し関心や見通しを持つ上で非常に重要である。本研究は，進路指導の一環としてのサポートブックが，生徒のライフステージを見据えた指導として実際にどのように機能するのか，実践を通して明らかにすることを目的とした。

１．目　　的

社会への出口を間近に控えた知的障害部門高等部の教育課程で「進路指導」の占める比重は大きい。個々の進路先を見据えた教育課程といっても過言ではない。それは，必要に迫られた，身につけなければいけない力であり，３年間でいかに個々のニーズに応えていくか，ということである。そこで，高等部では「ライフステージ」を卒業後すぐ～約10年間と考えて，その「ライフステージ」そのものを研究していく。その上で，高等部の「めざす生徒像」をどう捉えるか，付けたい力とはどういうものなのかという，非常に迫られた課題を今あらためて研究することにした。どんな力を付けたいかということは，即ち，どんな大人になってほしいかということであり，そして，卒業後どんな生活をしてほしいのか，ということを，どの学年・どの生徒集団でも取り組める内容にし，必要な支援の場面を考えていこうと考えた。

現場実習の時に（将来にわたって使える物を作りたいが，とりあえずは在学中の実習時の生活にしぼって）自分がわかる，あるいは，相手に伝えるためのサポートブック作りをすることにした。

２．方　　法

（１）　１年間の計画

６月の外部実習で使用…改良したり，深めたり，基本形を検討したりする。

10月の外部実習で使用…改良したり，深めたり，基本形を検討したりする。

生徒全員にどの形かのサポートブックが用意できるようにする。

（２）　方法

A　教員が担当する生徒が必要な項目の物を作ってみる。特に新３年生。主に，生徒本人が主体的に行動する時の支援となる内容物が考えられるが，中には自分で職場の方に伝えられない時に使用することも考えられる。

※項目として考えられること（就労移行支援のためのチェックリスト・障害者職業総合センター）

・起床・生活リズム・食事・服薬管理・外来通院・体調

*岡山県立岡山東支援学校　　**井原市立井原中学校

不良時の対処・身だしなみ・金銭管理・自分の障害や症状の理解・援助の要請・社会性・挨拶・会話・言葉遣い・非言語的コミュニケーション・感情のコントロール・意思表示・昼休みの過ごし方等

B　現在，支援室にある生徒用サポートブックの枠を利用して作る。新１年生と２年生の一部。

C　今まで作ってきた物（教科・課題別学習や生活単元学習で学習したプリント　例：　一人でできる料理・ボタン付け・帰宅連絡の方法・電車の利用等）

D　アフターケアをして，必要性を強く感じた生徒に作る。現３年生。

・その他

ケースは，支援室で使っているポケットアルバムのような物がよいか。

教科別・課題別学習や生活単元学習で取り組める部分があるか。

３．結　　果

・卒業後の日常生活をスムーズに行うために，在学中の学校生活全般から伺える本人の困り感，あるいは，支援する側（立場）から必要，知っておきたいことを記した物を作る必要があると感じた。

・かつて高等部には，本校バージョンのサポートブックがあった。

・個々の生徒によって，必要な項目が異なっている。

・校内実習で，学年の枠を越えて教師が指導者になったとき，支援者側のサポートブック（図４）があれば，個々のニーズによりそった適切な支援を行うことができる。

・特に，現場実習で外部に出たとき，本人用のサポートブックがあれば，一人でできることが増え，自信に繋がると考えた。

・本人用のサポートブックを作成する際，本人が何を必要としているのかを具体的に知る必要があり，個々のニーズに合った物を作ることが大切である。

・全体テーマに基づき，授業の中でサポートブック作成をすることにした。

《１年生の実践》

１年生は校内実習であり，特に１学期は，学年団で１年生の生徒を見ていたため，個々の支援のサポートブックの必要性をあまり感じなかった。２学期の実習は，高等部の縦割り作業班を組み，他学年の教師からの支援を受けることも考えられるため，個々のニーズにあったサポートブックを作成することにした。本人用のサポートブックは校内実習であったため，あまり必要とすることがなく，実習中ほとんど見ることがなかった。支援者用のものとして，担当があらかじめ支援者に知らせておく必要があると思ったことを書き綴ったサポートブックを用意し，実習に臨んだ。実習をすすめていく中で，作成時には気がつかなかった必要とする項目がいくつか出てきて，赤ペンで書き加えていく部分が多かった。来年度の外部実習には，今年度作成したものを基盤に，実践的な本人用のサポートブックや支援者用のサポートブックをもって臨むことができると思われる。

《２年生の実践》

＊現場実習におけるサポートブック活用の反省

・サポートブックを作成した教師と実習先に引率した教師が異なっていて，サポートブックを使いこなせていなかった。

・グループ（２～３人）での現場実習だったため，できる人のマネで苦手な場面ものりきった場合が多かった。

・通勤途上のハプニング等，色々な困り感を想定してのサポートブックをつくってみたが，本人は公共交通機関も使用せず，他人を頼ることもせずという生徒がいた。

・必要な内容を探すことが負担になり，十分活用ができなかった。

・１日の流れなど写真で示した物が最適ではないか，実習先での個々の生徒の情報交換を行い，有効に活用されるよう検討が必要。

・教師側でのみサポートブックを作成するのではなく，必要としている（使える）生徒には，生徒のニーズに応じたサポートブックを教師と一緒に作成することが必要であると気づいた。

・そこで，３学期の実習前には，サポートブック作成の授業をすることにした。

《３年生の実践》

まずモデルとなるサポートブックを作成するために，

重ならないように配慮して，対象生徒を抽出した。

＊10月の現場実習のために

・対人関係における予想される問題行動についての手立てとしてのサポートブック

・自分で納得しなければ動きにくい生徒の文字やスケジュール表などの視覚支援が優位な特性を考慮したサポートブック

＊卒業後の社会的自立に向けたサポートブックつくり

・生活に関すること
・仕事に関すること
に分けて，HOW-to式で作成した。

このモデルは，現３年生の多くの生徒に活用できるものと考える。

アフターケアで確認，検証をしていく

各学年の取り組み（アフターケアによる確認，検証を通して）

（１）　１年生の実践から

１年生は校内実習が主体であり，入学後の１学期は，人間関係構築のため学年担任団で１年生の生徒に関わる形であるため，個々の支援のサポートブックの必要性をあまり感じられない。しかし，２学期の実習では，高等部の縦割り作業班を組み，他学年の教師からの支援を受けることから，個々のニーズにあったサポートブックを作成することが，人間関係を広げていくうえでも必要である。本人用のサポートブックは日常の学校生活と大きな変化がないため，あまり必要とすることがなく，実習中ほとんど見ることがない。支援者用のものとしては，担当があらかじめ支援者に知らせておく必要があると思ったことを書き綴ったサポートブックを用意することが，より円滑に実習を進めるうえで効果的である。そして，実際に実習をすすめていく中で，作成時には気がつかなかった必要とする項目について赤ペンで書き加えていくことで，より最新のサポートブックの作成に役立つことになる。次年度の外部実習に向けて，今年度作成したものを基盤に，実践的な本人用のサポートブックや支援者用のサポートブックをもって臨むことで，現場慣れの一助になる。

（２）　２年生の実践

１，２学期の現場実習におけるサポートブック（図３）活用では，グループ（２～３人）での現場実習であるため，主体性を持って臨めず，他の人に依存しながらの実習場合が多いというのが現状である。反面，通勤途上のハプニング等，色々な困り感を想定してのサポートブック（図１）や公共交通機関も使用せず，他人を頼ることもせずという生徒もおり，サポートブックが実際場面で十分に機能していないことも多い。サポートブックを作成した教師と実習先に引率した教師が異なっていて，サポートブックを使いこなせていないように思われる。そして，必要な内容を探すことが負担になり，十分活用ができなかった。そこで，本人の実態にあったように，１日の流れなど写真で示した物が最適ではないか，実習先での個々の生徒の情報交換を行い，有効に活用されるよう検討が必要であると感じた。以上の反省から，教師側でのみサポートブックを作成するのではなく，必要としている（使える）生徒には,生徒のニーズに応じたサポートブックを教師と一緒に作成することは，生徒の主体性を育てるためにも必要であると改めて感じた。３学期の実習前にサポートブック作成の授業をすることで，生徒のその取り組みを実践に移すこととした（表１）。

（３）　３年生の実践

モデルとなるサポートブックを作成するために，特性が重ならないように配慮して，３人の対象生徒を抽出した。１つ目のモデルは，対人関係における予想される問題行動についての手立てとしてのサポートブック，２つ目は，自分で納得しなければ動きにくい生徒の文字やスケジュール表などの視覚支援が優位な特性を考慮したサポートブック,そして３つ目は,卒業後の社会的自立（生活に関すること・仕事に関すること）にHOW-to式で作成したサポートブックである。卒業を目前に控えた３年生は，この３つのモデルをベースに各生徒一人一人に適したサポートブックを作成して送り出したいと考えている。特に３つ目のモデルは，対象生徒だけでなく，将来保護者からも自立し，社会的自立を目指す生徒（新天地育児院・善隣館・保護者側に家庭教育力や経済力的に期待できにくい家庭などの生徒）にも活用できる物と思われる。

※３年生のサポートブック作成に関して

卒業を目前に控えた３年生は、担当生徒の実態と課題をまとめ、それぞれに早急に必要であると思われるサ

ポートブックの作成を目指した。

○パターン１

２学期の現場実習のために

事例１　Ａさん・・・　卒業後の進路先：自律訓練「○□の里」→就労移行

〈対人関係における予想される問題行動についての手だてとして〉

事例２　Ｂさん・・・　卒業後の進路先：一般企業「×△屋」

〈納得しなければ動きにくい、文字やスケジュール表などの視覚支援が優位な特性を考慮して〉

○パターン２

卒業後の社会的自立に向けて

事例３　Ｃさん・・・　進路先：一般企業「△×○」母親が病気、いずれは独立して生活せざるを得ない？

『仕事に関すること』『生活に関すること』に分け、その中で具体的な事柄を挙げてhow-to式に適切な対処法を列記した（表２）。

→３学期に本人とより必要な項目、具体的な内容について考え、作成していく。

※このサポートブックは、対象生徒だけでなく、将来保護者からも自立し、社会的自立を目指す生徒（新天地育児院・善隣館・保護者側に家庭教育力や経済力的に期待できにくい家庭などの生徒）にも活用できると思われる。

４．考　　察

これまでの取り組みを通して，各学年間の連携の重要性を再認識した。１年生は今年度赤ペンで書き加えていった部分を踏まえ，今後２年生のサポートブック作りを参考に来年度の外部への現場実習にいかせる物をつくっていく必要性がある。また，２年生は３学期の実習にいかすことができたサポートブックとまた新たな自習先での必要な項目を入れたサポートブック作りに取り組んでいく。３年生は卒業後のアフターケアで確認，検証をしていき，社会的自立を応援したい。

そして，学年ごとの縦の系統性も考えた実践として，今後も生徒自身が自立する手立てとなるサポートブックの作成を目指したい。そのためには，１，２年生の段階で個々の障害の特性に配慮した個別の進路指導を徹底させるべきである。３年生では，目前に迫った就労に向けて，より個々の特性に沿う内容での疑似体験（職場体験）を積めるようにしたい。就労後の短期での離職を回避し，職業生活が定着していくためには，個々の特性に配慮するとともに，社会的な自立を目指すための訓練的な進路指導も不可避であると考える。

文　　献

（１）　熊谷公明・栗田　広（編）(2000) 発達障害の臨床．日本文化科学社

（２）　前川久男（編）(2006) 特別支援教育における障害の理解．教育出版

（３）　須田　修（編）(2009) 情動的な人間関係の問題への対応．金子書房

表１　「サポートブック作り」授業の流れ

学習活動	指導上の留意点と必要な支援	備考
１ 今回の現場実習の目的を確認する。	○前回までは２～３人のグループでの現場実習だったが，今回は一人で臨むことを確認させる。	一覧表
２　現場実習への不安や今困っていることについて話し合う。	○面接を終えて，実習開始までに不安やこまっていることについて解決できるように話を引き出していく。 ・公共交通機関について ・仕事開始までの流れ ・準備物 ・休憩時間の過ごし方 ・急に体調が悪くなったときの連絡方法	ワークシート
３　現場実習をスムーズに行うためのサポートブックを作成する。	○個々のニーズに必要なサポートブック作りを担当者と相談しながら作成する。 ・事前に会社の写真など個に応じて準備しておく	サポートブック
４　まとめをする。	○自分で活用できるサポートブックを作ったことで自信をもって現場実習に臨めることを話す。	

図１　現場実習に向けての不安や悩みワークシート

・企業名（　　）

・名前　（　　）

１　会社へ行くまでの不安はありますか？
（例）　自宅　―（ＪＲ・バス・徒歩）―　会社
　　自宅　―（　　）―　会社

２　会社へ着いてまずすることは？
（　　）
（　　）

３　ロッカーに荷物を入れ，着替えを済ませて，仕事場へ行きます。
準備物は何ですか？
（　　）

４　通勤途中で自転車が故障しました。どうしますか？
（　　）

５　通勤途中でお腹が痛くなりました。どうしますか？
（　　）

図２　自己紹介カード

自己紹介
・わたしのなまえは（　　）です。
・（　　がっこう　）からきました。
・すきなことは，（　　）です。
・よろしくお願いします。

図３　サポートブック（見本）

・企業名〔　　〕

・担当者〔　　〕

・住所　〔　　〕

・ＴＥＬ〔　　〕
　自宅ＴＥＬ〔　　〕
　学校連絡先〔　　〕
　緊急時連絡先〔　　〕

１　（　　）起きる
　（　　）自宅を出る
　（　　）会社に着く
　（　　）タイムカードを押す
　（　　）ロッカーでの着替え，仕事の準備

２　（　　）昼休憩，（　　）で昼食を食べる
　（　　）仕事の準備

３　（　　）ミーティング
　（　　）退社，タイムカードを押す

図４　共通理解表

※見通しを持たせるために，１日の流れを事前に確認しておく。
・新しいことで不安な時には，練習しておく
※自分の思いと違うことを言われたとき，本人の行動が止まることがあります。
①いやなとき：かたまります。しばらく時間をおいてください。
②わからないとき：次の行動を知らせて（声をかけて），待ってください。
※親しみを込めてスキンシップ（握手）をすることがあります。
・度が過ぎるようでしたら，注意してください。

〇着替え：自分でできます

〇移動　：自分で出来ます

〇食事　：自分で出来ます

（食べたくないときは，残してもそのままでよい）

〇トイレ：使い方を確認する。（汚物入れの場所，トイレットペーパーの確認）

★トイレからなかなか出てこないとき
①外から問いかけ「どうしたの？」「何か手伝いましょうか？」
：「も　れ　た　～」
②大便がでなくて困っています。
待つしかない，時々様子を見に行って，声をかける。
③失敗したとき・・・・着替えの下着を持って行くと，自分で出来ます。
★生理の時・・・・・・自分でナプキンはかえられますが，確認が必要です。
★和式・・・・・・・・使い方の説明をします。
★大便が出たとき
①流したかどうか，また，流れたかどうか確認してください。（固まりが大きすぎて便器が詰まることがあります。）
②下着が汚れてしまっているとき：「手伝いますね。」と言って中に入って尻を拭いてください。

〇掃除：ほうきは，集める場所がわかっていると，ゴミを集めるところまで掃くことが出来ます。

雑巾絞りは練習中です。

表２　「仕事をしている時に，こんなことが起きたときには…」マニュアル

『イライラしてきたら？』

→　○：指導者に一言報告して少し離れる
　　○：深呼吸をする
　　○：顔や手を洗って気分を変える

『不安になったり頭や腹が痛くなったら？』

→　○：とりあえずそのまま続ける
　　○：ゆっくり深呼吸をしてみる
　　○：指導者に頭が痛いと言う
　　○：その場にしゃがみ込む
　　×：手を止めてそのままボーッとする
　　×：誰かが気づいてくれるのを待つ
　　×：「できないかも、、、、」「できない！」と言う

『しまった！　間違えた！　ということがあったら？』

→　○：指導者にありのままを言う
　　○：どうしてそうなったかを説明する
　　×：その場を去る
　　×：気づかれないように隠す
　　×：素知らぬ顔をする
　　×：自分は悪くないことを言う
　　×：少しウソを言って自分が悪くないようにする
　　×：気づかれないように違う話をする

『「教えて」と頼んでも、答えてくれない人がいる。どう解釈する？』

→　○：自分のことに集中して、聞こえていないのかな
　　○：教える自信がないのかも、、、
　　○：違う人か、指導者にたずねてみよう
　　×：こいつ意地悪をしているぞ
　　×：こっちを向くまで、何度も呼びかけよう